# 特別支援学級在籍児童に対する交流学級での支援

## ―誰もが安心して学ぶために―

**齋藤　佳子・司城紀代美**

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第９号　別刷

２０２２年８月３１日

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第9号　2022年8月31日

# 特別支援学級在籍児童に対する交流学級での支援†
## ―誰もが安心して学ぶために―

**齋藤　佳子*・司城紀代美****
鹿沼市立みどりが丘小学校*
宇都宮大学大学院教育学研究科**

本研究は、特別な支援を必要とする児童が交流学級において交流学習を進める時、学習上の困難や不安を和らげることができたり、周りの児童と良好な関係を築いたりすることができるような支援の方法の在り方を探求していくことを目的とするものである。交流学級での参与観察を通して、(1) わかりやすく、見通しがもてる環境、(2) 教師の的確な支援（実態、本人の思いを受け止めたうえでの支援)、(3) 交流学級の友達との関係が重要であることが示された。

キーワード：特別支援学級　交流及び共同学習　安心感

### 1. 問題と目的

文部科学省（2015）は、交流及び共同学習について、障害のある子供とない子供が活動を共にすることの意義を以下のように述べている。

・障害のある子供たちの経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐくむ上で重要な役割を担っている。
・小、中学校の子供たちや地域の人たちが、障害のある子供とその教育に対する正しい理解と認識を深めるための機会である。
・同じ社会で生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくための基盤づくりとなる重要な活動である。

筆者が特別支援学級を担任している際に、特別支援学級の児童たちが交流学級の友達の様子を話す姿などから、特別支援学級の児童たちにとって、交流学習はとても有意義なものとなっていることがうかがえた。

しかし、学習に対する自信のなさからか、苦手な教科の交流学習に消極的だったり、友達の前で自分の思いや考えを素直に表現できなかったりすることも少なからずあった。また、初めての活動や、みんなと同じようにできないことへの不安や戸惑いを感じている様子も見受けられた。そうした思いも受け止め、交流学級の担任の先生と情報を共有しながら支援にあたってきた。このような経験から、特別支援学級に在籍する児童が交流学級でも安心して学び合い、有意義な学校生活を送れるための支援の方法の在り方を探究していきたいと考えた。

本研究では、特別な支援を必要とする児童が交流学級において交流学習を進める時、学習上の困難や不安を和らげることができたり、周りの児童と良好な関係を築いたりすることができるような支援の方法の在り方を探求していくことを目的とする。

### 2. 方法

#### (1) 対象

小学校の特別支援学級に在籍している児童が、交流学級で学習を行う際の授業の様子を参与観察し、周りの児童や教師とのやりとりや、学習への取組状況などを把握する。

---

† Keiko SAITO*, Kiyomi SHIJO**: Support for Children Enrolled in Special Needs Classes in Exchange Classes -For Everyone to Learn with Peace of Mind
Keywords: Special needs classes,Exchange and joint learning,Peace of mind
* Midorigaoka Elementary School
** Graduate School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

対象児童が不安に思っている授業を中心に、つまずきや不安、戸惑いなどが和らげられた支援の方法、教師や周りの児童の声掛けなどを考察する。

対象としたのは知的障害特別支援学級在籍の６年生Ａ児の交流及び共同学習の様子である。Ａ児は国語と算数、自立活動を特別支援学級で学習し、それ以外の教科は、交流学級で学習している。学習に対して真面目に取り組み、支援学級では先生やクラスメートにわからないところを質問したり逆にわからないところを教えてあげたりする姿が見られる。交流学習にも、進んで行っているが、交流学級では、先生や友達にわからないところを質問したり、困った時に助けを求めたりすることができずにいる様子も見られる。

### (2) 手続き

20XY年６月中旬から７月中旬にかけて、週１～２日の頻度で、朝の会から４時間目終了までの約４時間、参与観察を行った。交流学級での授業、特にＡ児が苦手意識をもっている外国語の授業を中心に観察を行った。他学年と合同の授業や、休み時間の委員会活動なども観察の対象とした。Ａ児が交流学習を行う授業では、筆者によるフィールドノーツの記述で記録を行い、外国語と家庭科の授業はビデオカメラでの撮影も行った。ビデオカメラは１台、Ａ児の様子が映る位置に固定設置した。授業中は、Ａ児をはじめ児童が分からないことがあれば助言したり、休み時間には話をしたりするなどして関わりをもった。また、担任やALT（外国語指導助手）の先生の空き時間などを利用して、児童たちの様子について話をした。なお、ビデオ撮影を含めた記録方法と、記録の研究への活用については、事前に学校と保護者の許可を得ている。

### (3) 分析方法

Ａ児が交流学級で学習を行っている時、つまずいたり、不安や戸惑いを感じたりした15の場面を抽出し、エピソードとしてまとめた。Ａ児が他者や物などをきっかけに、行動を起こしたあるいは起こさなかった結果、不安や戸惑いが和らいだと思われる様子に着目をして分類を行った。分類項目は、〈先生〉：先生からのアドバイスや支援などがきっかけとなったとき、〈友達〉：友達からのアドバイスや声掛けや要望などがきっかけとなったとき、〈物や事象〉：物や周りの様子などがきっかけとなったとき、〈自分〉：自分で判断して行動したときである。

## 3. 結果と考察

エピソードの分類結果はTable 1のとおりである。

Table 1 エピソード一覧

| No. | 月　日 | エピソード名 | 場面 | きっかけ |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 6/ 7 | 連絡帳のページが足りない | 朝の会 | 物・先生 |
| 2 | 6/7 | お腹が痛いから保健室へ | ２校時～業間 | 自分・物 |
| 3 | 6/16 | 読む声が小さい | １校時／道徳 | 先生 |
| 4 | 6/16 | タブレットでお絵かき | 休み時間 | 友達 |
| 5 | 6/18 | 借りたフェルトペン | １校時／書写 | 物・友達 |
| 6 | 6/18 | 読み聞かせ | 委員会活動 | 自分・友達 |
| 7 | 6/18 | 分かる言葉があった！ | ３校時／外国語 | 先生 |
| 8 | 6/25 | 名札をつけ忘れた | １校時／検診 | 物・先生 |
| 9 | 6/25 | ペアトークの相手探し | ３校時／外国語 | 自分・先生 |
| 10 | 7/2 | 最後まで丁寧に書きたい | １校時／書写 | 自分・先生 |
| 11 | 7/2 | 自分でやりたい！ | ３校時／外国語 | 自分・友達 |
| 12 | 7/9 | おすすめの国の発表会 | １校時／外国語 | 先生・友達 |
| 13 | 7/9 | ポケットが見当たらない | ３校時／家庭科 | 友達・先生 |
| 14 | 7/15 | 動作がつくとわかりやすい | ２校時／外国語 | 先生・物 |
| 15 | 7/15 | プールに入りたい | ３校時／体育 | 友達 |

ここから、Ａ児が活動中に感じた不安や戸惑い、学習におけるつまずきなどを和らげたり改善できたりしたのは、どんなことが関係しているのかについて考察していく。なお、〔　〕内は関連するエピソードの番号である。

まず、担任をはじめとする、教師の声掛けやさりげない配慮が様々なきっかけとなっていることがわかる。Ａ児の実態を把握し、困っている様子の時に、適切なアドバイスや声掛けをすることで、学習や行動のヒントを与えることができるといえる〔エピソード3,7,8,9〕。また、Ａ児にとってわかりやすい学習環境や教材が用意されていたこと〔エピソード14〕も、不安を和らげる要素であったといえる。見通しを持たせたり、支援学級や保健室など安心できる場所を使って話をしたり活動したりすることも

有効であった〔エピソード1,2,6〕と考える。

次に、友達の存在である。交流学級のクラスメートと積極的に関わりをもつことは少ないA児だが、自分が気にかけている友達や、わからないことを聞きやすい友達には、自分から話し掛けて不安を解消しようとしている。自分のよさを認めてくれる友達や、困った時に声を掛けてくれる近くの席の友達のおかげで、自信をもって活動に取り組めたり、先生に質問することができたりしていた〔エピソード4,5,13〕。支援学級では見られないような不安な様子をしていたA児が、友達の声掛けでとても安心し、ほっとしたような表情になった場面もあった〔エピソード5,12〕。

最後は、A児本人の意識が変わってきたことである。4月から最上級生となり、委員会活動などで下級生と一緒に行動するようになった結果、苦手なことでも頑張ってやってみようとする気持ちや、今までの経験をいかして何とかやってみようとする意欲が出てきたといえる〔エピソード6,15〕。以前より、周りの状況を見ながら行動することができるようになってきたことも大きい。もともと、自分でできることは自分でやろうという意識をもっているA児だが、自分の苦手なことや、得意なこと、自分の身体のことなどがだんだんと分かるようになってきて、必要な時には周りからのアドバイスや助けを受け入れることができるようになった〔エピソード10,11,13〕ことも、不安を和らげることにつながっていると考える。

## 4. 総合考察

参与観察から、特別支援学級に在籍するA児が、交流学級で学習を進める際に感じたつまずきや戸惑い、不安などを和らげるのに有効だと思われる支援や手立てについて、以下の3点が考えられる。

### (1) わかりやすく、見通しがもてる環境

A児は耳から入る情報よりも目から入る情報のほうがわかりやすい特性をもっているため、視覚的な情報提示が有効であると考える。外国語の授業で行っているジョリーフォニックスは、アルファベットの発音を覚える時、それに合わせた動作も一緒にやりながら学習する。耳で聞くだけでなく、目で見てわかる動作と発音を結びつけることで、A児は学習しやすいと思われる。また、交流学級の背面黒板には、今日の予定と次の日の予定が常に示されており、いつでも見て確認できるようになっている。連絡帳用に書いてあるので、持ち物などもわかり、A児も支援学級にいる時に交流学級での予定を自分で確認し、時間割の変更などにも柔軟に対応できている。こうした「見通し」があると、交流学級でも安心して過ごせるようである。このようなA児にとって有効だと思われる環境を、交流学級でも学校全体でも整えていけると、不安や戸惑いが少なくなり、安心して学校生活が送れるのではないかと考える。

### (2) 教師の的確な支援（実態、本人の思いを受け止めたうえでの支援）

1日のうちの多くの時間を交流学級で過ごすA児にとって、本人や学級の実態をよく把握し、適切な声掛けやアドバイスをしてくれたり、時には様子を見守ったり、周りの児童との関係をつないだりしてくれる交流学級の先生の存在は、非常に大きいといえる。4月当初からずっと、先生は、外国語の授業に消極的なA児や他の特別支援学級在籍児童たちのことを心配し、ALTとの打合せの際に、どうしたら彼女たちも安心して楽しく学べるかを話し合ってくれていた。エピソードの中には発表会のやり方に関する工夫があったが、それ以外にも、普段の授業の流れや、ヒアリングやスピーキングテストのやり方など、通常の学級で学ぶ他の児童にも、不安が少なくより分かりやすい方法をいろいろ試してくれたことは、全ての児童にとっても有効であると考えられる。また、いろいろな学校で教えているALTも、他校の特別支援学級在籍児童との学習を思い出しながら、「こんな方法はどうだろう」と試行錯誤しながら授業を考えてくれたことが、A児の外国語の授業に対する苦手意識や不安を和らげる助けになったといえる。

それから、今回の参与観察では、A児が自分の意志で苦手なことを練習しようとしたり、自信があることは自力でやり遂げようとしたりする様子が多く見られた。6年生になり、自分のことや周りの様子が今までより分かるようになってきたからだといえる。そんな彼女の「6年生の教室や、委員会活動などでも頑張りたい」、「自分でできるようになりたい」という思いを受け止め、尊重したうえで、苦手なことを補える場所や機会を提供したり、時には見守ったりすることも必要であると考える。どのようにしたらよりよい状況を作り出せるのかを教師側が見極めたり一緒に考えたりすることも、不安や戸惑いを

和らげ、自信を育てることにつながると考える。

### (3) 交流学級の友達との関係

A児は、得意なものや自信のあるものに対しては自分から進んで活動に取り掛かることができるが、そうではないものに対しては消極的であることが多い。特に、交流学習においては、学年が上がるにつれて内容も難しくなり、自信をもてずにいることも多いと考えられる。また、先生の話を集中して聞くことが難しく、次の行動が分からないことも多く、観察をした外国語や体育、家庭科の授業などではそのような姿がよく見られた。そのような時は周りの友達の様子を見て、それを参考にしながら学習を進めていた。活動内容によっては、周りの児童も自分のことで精一杯でA児に声を掛けられなくても、友達のやっていることを見て、次にやることを理解している様子が見られた。こうしたことから、交流学級の友達の行動は、A児に大きな影響を与えていたといえる。授業中の友達の行動が参考となるようなものであることが多いため、A児が不安や困難を感じることが少ない状況で学習を進めることができていると考える。

また、A児が交流学級で学習する時、自分から積極的に周りの友達と関わりをもとうとはしないが、友達のアドバイスや提案には素直に応じたり、友達から声を掛けてもらうのを待っていたりすることがある。自分から「困っている」と発信できず、そのまま何とかその場をやり過ごそうとしてしまうこともあるが、そういう時、誰かが気づいて声を掛けてくれたり、先生につないでくれたりすることもあり、そのような友達の存在が、A児に大きな安心感を与えてくれている。クラスメートの何人かは、A児が絵や工作が上手なのを認めていて、交流学級のお楽しみ会などで賞品を作る係を一緒にやろうと誘ってくれて、楽しく活動できたこともあった。A児は自分でも「やりたい」と思っていた係だったので、休み時間にも友達と進んで活動するなど、とてもいきいきとしていた。そこには、同じく工作が好きな、特別支援学級在籍児童B児の姿もあった。B児も、交流学習の際は、消極的な面を見せることがある児童だが、周りの友達の誘いや声掛けによって得意なことをいかして良好な関わりをもてる場面が多く見られる。お互いのことをよくわかって認め合える環境は、A児だけでなく他の支援学級在籍児童にとっても安心できるものだといえる。

このような人間関係作りは、児童同士だけでは難しい面もある。交流学級の児童が、A児をはじめとする特別支援学級在籍児童に対して「みんなと違う」存在として接するのではなく、その教室で学習するみんなが「それぞれ違う」なかの一人として理解し合えるような関係を、教師が日々の授業や学級経営を通して意図的に作っていくことも必要であろう。また、特別支援学級に在籍する児童自身が自分のよさや得意なことに自信をもち、それらを交流学級で発揮したり、困った時に助けを求めたりできるような雰囲気作りも大切であると考える。

令和4年4月1日 受理

# Support for Children Enrolled in Special Needs Classes in Exchange Classes
# -For Everyone to Learn with Peace of Mind

Keiko SAITO, Kiyomi SHIJO